

書のみかた

書をどうみるか 本質論から

書とは何か

- 本質論
- 歴史

文字からみた書の3つの側面

視覚性、聴覚性、意味

形・音・義（書法・音韻・意味）

「書き言葉（文字）→視覚性の発達したものが書

「話し言葉（音声言語）→西洋で発達

書の視覚性(造形性) 3つの側面

点画

(1画の筆触 絵画ではタッチ)

結体

(1字の構成、絵画ではモチーフ)

篆隸楷行草の書体

字体の規範と字形の自由さ

章法

(字間の構成 絵画では構成)

視覚性からみた書の2つの基軸

時間性、身体性

過程芸術としての書

点画=筆触^{タッチ}が時間の経過に伴い刻まれていく

(その様子をたとえる様々な用語:

用筆 執筆法 腕法 運筆法

筆意(意在筆先) 筆勢 筆力

遅速、リズムなどの時間、角度 など)

書とは芸術(美)であるか

明治期、日本近代 の初めには岡倉天心vs.小山正太郎の「書は美術ならず論争」があったがいまだに決着がついていない

→参照:日本美術史ノートの「日本近代美術の問題」

<http://www.geocities.jp/qsshc/cpaint/syohabijyutu.html>

現時点での仮の結論:

**書とは狭義の「美術」でなく、
芸術である**

書をどうみるか 歴史から

書とは何か

└ 本質論

└ 歴史

中国書法史 5つのポイント

問題

篆・隸・楷・行・草の五書体
のうち
最も早くできた書体はどれ？

1. 唐までの書体の創造

篆 → 隸 → 草 → 行 → 楷 の展開

篆書 𠂇 (秦の公用体、多様な書体を統一)

隸書 𠂇 (漢の公用体、波磔(八分)の洗練)

草書 み (公用体を略した実用書体)

行書 水 (公用体をくずした実用書体)

楷書 永 (唐の公用体、三折法の完成)

2. 4つの時代区分

晋韻 (王羲之、行草書の力のバランス)

唐法 (歐陽詢、虞世南、褚遂良の楷書)

宋意 (蘇軾、米芾、黃庭堅の個性)

元明態 (様々なスタイルの応用)

以上は明末 董其昌、清初 梁巘(りょうけん)の説
(特に楷行草の書体にあてはまる)

参考: 唐楷・宋行・明草・清篆

3. 正系と逸脱

正系の流れ(晋王羲之の継承)

唐太宗、宋淳化閣帖、元趙孟頫、
明文徵明、董其昌、清乾隆帝など



正系からの逸脱 北魏碑、唐顔真卿

禪の墨蹟(藁筆、かすれ、にじみ)など

(日本書道史の二重性(唐様と和様)と複雑さ
奈良平安の王羲之尊重、鎌倉以降の墨蹟偏愛)

4. 筆触の展開

無折法  (甲骨文、金文、篆書の筆触)

二折法  (漢の隸書、晋王羲之の行草)

三折法  (唐で完成、楷書の筆触)

多折法  (宋以降、黄庭堅など)

無限折法 
石川九楊の説 (清 八大山人、金農など)

5. 筆と刀

筆による文字の歴史 「筆触」
(刀のようにとぎすました**肉筆**による書)

↓↑ 相互影響

刀による**刻字**の歴史 「筆蝕」石川説
(殷周**甲骨文**・**金石**、漢印・漢碑、北魏碑、清篆刻)



宋以降: 印刷術による活字(タイプグラフィ)の歴史